

山と博物館

第26巻 第12号

1981年12月25日

大町山岳博物館



完成した新館(最上方)と旧館(中)、長野県山岳総合センター(下方)

撮影 宮沢 洋介

山岳博物館新築落成にあたって

昭和五十六年十一月、待望の市立大町山岳博物館の新築落成を迎えた、ここに大町市としては山岳都市の中でも特色を持った博物館が新しく誕生したわけで、関係者の御喜びは如何ばかりかと思われ、御同慶の至りであると申し上げるものである。

ここに述べるまでもなく、今回が大町市において最初の博物館建設ではなく、戦後間もなく地域住民の力を結集して設けられた大町山岳博物館があり、関係者の御努力で施設の拡充や資料の収集が続けられた。その間には、未知の部分の多かった所の、ニホンカモシカやライチョウの飼育研究を手がけ、困難な中で貴重なデータを得るなど、他に例を見ない活動が続けられていたのである。

こうした中で建物の老朽化が進み、貴重な資料の保存と展示や、入館者の不便さも増大したので、全面的な改築をという気運が昭和四十五年頃から盛上がり、そこで先進地の視察や仮設計の討議を重ねながら、博物館建設推進委員会の設置によって、より強力にこの運動が進められた。昭和五十四年度には、新館建設地のボーリング調査から位置についての決定を見るに至った。この間各方面の尊い御助力を得ながら基本計画がまとまり、計画書の国と県への提出を終えて、昭和五十五年九月四日には起工式が行われ、工事は関係者一同の御努力によって、豪雪などの悪条件の中を進められて来たのであった。

新博物館は地下一階地上三階という立派なもので、中に入ればゆったりとした中に、新しい構想が生かして取入れられ、各施設は素晴らしいの一語に尽きるといえよう。又、三階はそのまま展望室であり、北ア連峰を一望にすることが出来るなど、山と自然保護をテーマに追い続けて来た同館の特色がここにも見られる所である。今後同館が地域の学術研究の中心となり、社会に寄与されることを念願するものである。

(山博運営協議会委員長 原田 暁)

小谷村の屋号

田舎では、どこの家にも屋号がある。小谷村の家々も、やはり殆どが屋号をもっている。小谷村の有線番号帳にのっている屋号を分類整理してみると、次のようである。

一、本家・分家に関するもの
 屋号を調べてみて気付くことの一つは、本家・分家に関する屋号の多いことである。

屋号	軒数	計	合計
大屋家(おやけ)	1	8	29
重家・重屋(おもや)	1	8	29
古家・古屋(ふるや)	1	8	29
おえ	1	8	29
新志家・新志屋(あたらしや)	1	8	29
新屋(しんや・あらや)	1	8	29
小屋家(こやけ)	1	8	29
新屋敷(あらやしき)	1	8	29
出居(でえ・でーき)	1	8	29
新敷(あらしき)	1	8	29
隠居屋(いんきょうや)	1	8	29
安出地(あせち)	1	8	29
新木戸	1	8	29
分家関係69			115
本家関係46			
合計			115

大屋家・重屋・古屋・おえなど、本家をあらわす屋号の家が小谷村中に四十六軒ある。これに対し、あたらしや・新屋・小屋家・新屋敷・でえ・新敷・隠居屋・新木戸など分家をあらわす屋号の家が六十九軒あり、本家・分家関係の家を合計すると、百十五軒になる。これは調査した家の八パーセント余りにあたると。

一目で本家が分家かわかるものが大部分であるが、「おえ」や「でえ」、「あせち」などはちよつとわかりかねる屋号である。

竹内利美氏の「信州の村落生活(中)むらの共同生活」という本の、南安曇郡奈川村屋形原の分家団成立に関する記事の中に「オエエ」

牛越嘉人

と呼ばれる家より「デエの工エ」と呼ばれる家が分家したことがのっている。北安曇南部でも、本家のことを「おえ」と呼ぶことが多く、私の家も同姓の人からは「おえ」と呼ばれたりする。小谷では居間のことを「おえ」と呼ぶことを「でえ」と呼ぶ。南小谷の「でえ」と呼ばれる家に有線が聞いてみたが、「いづれも「大屋家」「古屋」などと呼ばれる本家があり、分家して出た家はかりであった。昔大家族でいた時に「でえ(座敷)」に住んでいたので「でえ」と屋号を付けたのだと年寄りから聞いたと話してくれる家もあった。

竹内氏の本によると、分家団は「チワカレ」と呼ばれ「分地した仲間」のことで、「ヂルイ」「アイチ」「ヂミヨウ」「アゼチ」と同じ意味のことばだろうとのことである。小谷の「あせち」「安出地」も分家をあらわす屋号であろうと思われる。「隠居屋」は、もちろん年寄りが隠居して出た家である。

二、職業に関するもの
 職業に関する屋号を持つ家もだいたいある。今はやっていないなくても、屋号から昔の職業が

屋号	軒数	計
鍛冶屋・鍛冶宗・大鍛冶屋	14	
みせ・下店・見せ・店・出店	12	
酒屋	8	
車屋	4	
畳屋	3	
紙屋	3	
板屋	3	
湯	2	
おけ屋	2	
蜜屋・下駄屋・米屋・木屋	各1	
かご屋・塩屋・おうぎ屋・かねや	各1	
ばんじょう・とうふ屋・はた屋	各1	
こう屋・ます屋	各1	
合計		64

わかつておもしろい。

最も多いのは、鍛冶屋・鍛冶宗・大鍛冶屋など鍛冶屋に関する屋号で、村中に十四軒ほどある。農作業に使用する鋤鎌をはじめ、各種の農機具の製作修理に大きな役割を果たしてきたものと思われる。大きな部落には一軒か二軒の鍛冶屋があったようである。

店に関する屋号の家も大分ある。殊に南小谷に多く、中土・北小谷にはあまりない。「酒屋」という屋号の家が大分ある。酒を造つた家や酒を売つた家と思われる。「車屋」というのは、多くは水車で精米などをやつた家。「紙屋」は紙すきをした家、「板屋」は屋根を葺く板(コバと言つた)を割つた家であろう。戦前は水車やガツタリで精米したものだが、戦後は精米機の普及によって、すっかりその姿が見られなくなつてしまつた。紙すきも、「紙屋」などの屋号が付いていない家でも大分やつたものだが、最近では全くやつていない家がなくなつてしまつてゐる。またコバで葺いて玉石で押えた板屋根も、トタン葺きの屋根の普及で殆んどその姿を消し、コバを割る仕事もすつかりなくなつてしまつた。

表にあるような屋号の家が、実際に屋号の仕事をしていたかどうか、一々確かめては無いが、多くは屋号のような仕事をしていたものと思う。

三、位置に関するもの
 ①上・中・下関係をあらわすもの
 上・中・下関係をあらわす屋号は、極めて多い。

「わかた」「わで」が最も多く、「大わで」「わだん」「天じょう」「水かしら」「かみ」などがそれに続く。大を上につけた屋号(「大わで」「大てんじょう」「大上」など)も大分ある。「道上」「宮の上」など、どこの上にあるかをあらわすもの、「上ごうら」と「下ごうら」「上みのげ平」と「下みのげ平」のように同じ屋号に上下を付けて区別したものもだいたい見られる。上に関係する屋号の家は百

屋号	軒数	計
上方・相方・和加多・和か田	24	
若田・わかた	21	
上手・和手・和出・わで	8	
大和手・大和出	8	
天上・大てんじょう	7	
上段・和段	6	
水頭・みずかしら	6	
上・かみ	6	
上の山・上山	3	
上郷浦・上ごうら	2	
上坂・上坂屋	2	
道上・水上・上がん沢・上隣	各2	
上西・宮の上	各2	
南の上・小坂の上・土屋館	各1	
上家・兼上館・松葉上	各1	
上の向・上の山中・わで屋敷	各1	
大上・上の後・上前戸・上大下	各1	
上横前・上中村・上みのげ平	各1	
合計		115

十五軒もあり、大へん多い。

「中」「まん中」などが多い。「大平仲」「中島中」「千沢中」など、地名に中をつけたもの、「町中」「林中」「よしの中」など、どんなところの中にあるかをあらわしたもの、「中わで」「中家」「仲あそ」「中盛出」など、中を上につけてその位置をあらわしているものなどが見られる。

屋号	軒数	計
中・仲・〇〇の中	24	
中島・仲島	8	
田中・田の中	5	
中上手・中和出・中わで	4	
中隣	4	
まん中・満仲	3	
田中・田の中	3	
中屋・中の屋	3	
中村・中西	各3	
中家・中家館	2	
中向・中下・中段	各2	
中の沢・中堂下・中盛出	各1	
中谷・町中・林中・仲あそ	各1	
中谷・よしの中・中はじ	各1	
合計		78

「下」「大下」などが大変多く、それについて「宮下」「道下」「堂の下」「学校下」「岩下」「山下」など、何の下にあるかをあらわすもの

が多い。「沢尻」「池尻」「麻生尻」「久保尻」など、下ではなく尻のついているものもある。また「上天下」に対する「下天下」「上みのげ平」に対する「下みのげ平」というようなものもある。

上・中・下関係の家数の合計は、二百九十軒で、調査戸数の二十パーセント余りを占める。

屋号	軒数	計
下・しもう・しも	18	102
大下・大志多	11	
宮下	8	
下出	6	
道下	5	
下わで	4	
下前戸・堂の下・沢尻・下どなり	各2	
下ごうら・下の向・下がん沢		
南の下・せぎ下・木戸下・学校下		
滝下・和手下・鍛冶屋下・岩下		
御子平下・戸石下・柴原下・池尻		
麻生尻・西の下・山下・平坂下・木下	各1	
久保尻・下寺下・木の下		
下橋度・下佐原・下尾・下村向		
下坂下・下団合田・下西・下下向		
下堂下・下水屋・下久保・下平		
下みのげ平・下栗・下中村	各1	
こしも		

屋号	軒数	計
西	7	49
東	6	
北の端	5	
南はじ・西隣・北落・北隣	各2	
西の沢	各2	
南はじ・北林・北久保・南原・南隣	各1	
長見屋・北の横目・小西・東太田		
ささら前度・西麻草・東田		
大西・向西・西花園・北花園		
南はじ・北村・南落・西山		

という屋号の家は少なく、「東」や「西」と

いう屋号の家の方が多い。

③前後・左右・近隣関係をあらわすもの
同じ屋号でも、使用している字は様々である。

屋号	軒数	計
前戸・明度・前渡・めいど	17	112
はじ	14	
向・向う	14	
雨城・宇城・うしろ	12	
横前・よこめ	8	
向井・むかい・むかえ	6	
横屋	5	
隣・となり	5	
大隣・大い成・おうとなり	5	
あつち・あつちむき	5	
おく・おくり	4	
はじわで・堂の前	各2	
穴畑前戸・宮の前・宮の脇・大向	各1	
裏町・せきむこう・横手・向後		
はずれ・木戸口・宮の向・向井村		
ませせ		
ませせ		

号がそれに続いて多い。「木戸口」や「ませせ」は部落の入口の家の屋号で、「おく」や「おくり」は奥の方にある家の屋号である。「あつち」とか「あつちむき」などというおもしろい屋号の家もみられる。

この仲間の屋号の家は百八軒あり、全体の八パーセント近くを占める。

このように位置関係をあらわす屋号は大変多い。位置をあらわすには基準になるものが必要である。本家や道や堂・宮などが基準になっている場合もあるが、多くは相対的な位置関係であらわしているようである。

四、家印によるもの

(七・ア・イ・ウ・エ・オ・カ・キ・ク・ケ・コ・サ・シ・ス・セ・ソ・タ・チ・ツ・テ・ト・ナ・ニ・ヌ・ネ・ノ・ハ・ヒ・フ・ヘ・ホ・マ・ミ・ム・メ・モ・ヤ・ユ・ヨ)

これらは千国部落の家印であらわされた屋号である。大変簡単な印で表現できて便利で

ある。

南小谷では千国のほかに梅池・雨中・下里瀬・蔵平・梨平・土倉・虫尾・峯・池原・北野などに六十四軒ほど家印を屋号としている家がある。梅池の民宿にも「かねた屋」「やまきゅう荘」「五館」「旅館」など家印をそのまま旅館名に用いているものがある。

中土には十四軒、北小谷には七軒ほど家印を屋号として用いている家がある。

家印を屋号として用いていない家でも、それぞれの家の家印は持っており、焼印を作つて下駄や家具に押しつけていることが多い。

千国や雨中・下里瀬など、やや街がかった部落に家印を屋号としている家が多いのは、位置関係ではあらわしにくいことなどによるものと思われる。

千国では△(かじや)から分家した家に△△、△△という屋号をつけてあるという。家印で呼んでいる家と、普通の屋号で呼んでいる家と、両方を併用している家があるようである。

五、出身地に関するもの

越後の出身だから「越後屋」、甲州の出身だから「甲州屋」といった類である。

池原から出たので「池原屋」、六合から出たので「六合屋」など数軒そのような家がある。

六、姓を屋号がわりにしているもの

特別屋号を持たない新しい家は、姓を屋号がわりにしている事がある。姓の後ろに屋を付けた「今井屋」「山崎屋」「松沢屋」などである。

七、地形に関するもの

山・原・島・峯・窪・平・坂・崎・はげなど地形に關係した屋号の家が三十五軒ほどある。

八、植物に関するもの

菊・松・梅・柳・桜・柿・栗・竹など、植物關係の屋号の家が十六軒ほどある。

九、田に関するもの

「たんぼ」「団合田」「二枚田」「どう田」など田に関する屋号が十四軒ほどある。

十、水に関するもの

「清水」「塩水」「がん沢」「長瀬」「横溝」など水に関する屋号が二十軒ほどある。人間が生活していく上で無くてはならない水に関する屋号が見られるのは当然のことである。

十一、新しい屋号

屋号とは言えないかも知れないが、梅池や蔵平の民宿や商店ではいろいろ考えて呼び名をつけている。

姓や名を使用したもの、屋号、家印を使用したもの、雪国や山岳關係のもの、高原の動物園關係のもの、地名を使ったもの、外国風のもの、その他「山賊」とか「ぐわらんどう」などというかわつたものもある。早く人に名前を覚えてもらうための工夫かと思われる。

まとめ

今までの屋号は、本家分家關係、部落内の位置關係などのものが多かった。部落的な生活が主な時代には、それなりに大切な役割を果たしてきたものと思われる。しかし、現在のように全国各地とのつながりが深くなり、各地から集まった人々が新しい部落を作るようになる、本家分家で結びついてきた今までの部落とちがってくるのは当然だし、位置關係などでは呼びきれなくなつてしまふ。観光地の民宿などは呼び名が今までと変わってきているのは当然のことである。

屋号で呼んだり呼ばれたりすると、氏名で呼ばれるのちがって、何か親しみを感ずるものもある。これからは、その家の歴史を秘めていききたいものである。

(池田小学校)

大町地方の餅つき

大日向 正門

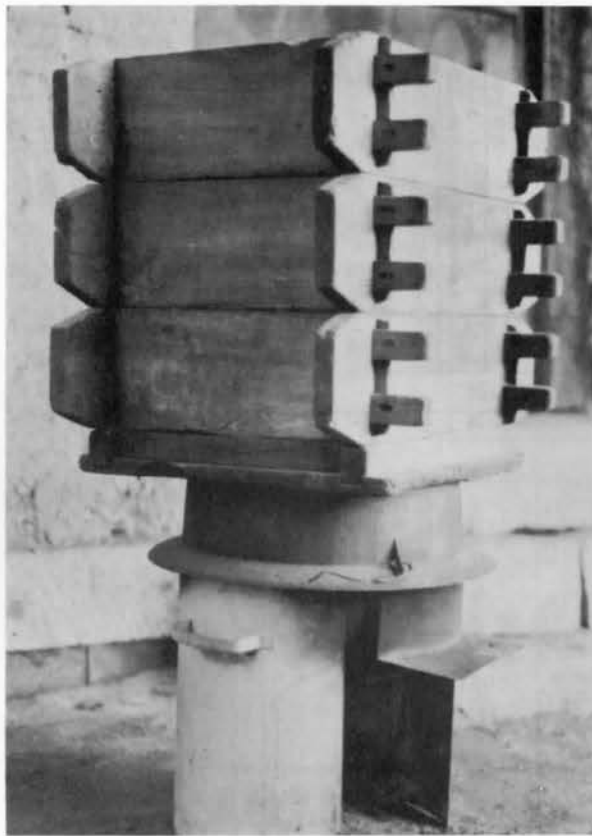
正月の餅は十二月二十八日につくならわしになっていましたが、今では二十五日ごろから都合のよい日につくようになり一定しなくなりまして。二十九日は苦日(九日)あるいは苦もちといつてこの日につく事をきらったものであります。しかしけがれのあつた家では苦をつき込むと云つて二十九日につく所もありません。もち米をふかすには昔は角セイロを使い三段に重ねてふかし一つのセイロにはもち米を五升入れたものであります。

一度に一斗五升ふかし臼で次ぎくと一人三臼ついたのであります。

一臼は五升つきと云つてつく量は五升を一つの目安としたもので六臼位つく家が多くありました。中には豆餅、粟餅、粉餅(しいなの粉を入れ又チチコ(カワラハコグサ)と呼ぶ山菜をつなぎに入れたもの)、こわ餅(うるち米もち米を半々にする)などつく家もありました。

お祝いの餅つきには臼の下へ新しい藁又はむしろを敷かないと不幸な事がおきるといつて藁等を使ったものであります。

お飾り(お供)は最初の一臼からとり神様の数だけとる所、月の数だけとるものだという



角セイロ

う所、恵比寿様に供える分は特に大きくという所、年神様の分二かざりだけを大きくとる所など場所によってみな違つております。

お飾り(お供)は元日の朝をなえます。

又一臼からは樹形と云つて斗櫛の大きさ(一尺余り)の正方形のもの二枚とり、里方へ年始めに行くときにもつて行く事になっております。

◎正月十四日、十五日は若年又物作りといつて餅をつき(若餅とも云う)この餅で稲の花を作り、米の粉で作つた野菜の形、マユの形等つくつた物と共に飾りつけます。

◎三月三日(四月三日)節供にはひな様を飾り甘酒と共に菱餅を供える。菱餅は青色にした草餅と白色の粉餅とを合わせて菱形に切ります。

◎五月五日(六月五日)の節供には餅をつきカヤ餅、柏餅を作ります。

◎八月十五日(十五夜)のお月見で餅をつきお月様に供えます。

◎九月十三日(十三夜)のお月見で十五夜と同じく餅をつき斗櫛に藁を敷き葉つきの大根と共に月に供えます。

◎十月十日(十日夜)餅をつき月へ供えると共に案山子の神様に供えます。所によつてやり方は色々あります。

角セイロは内側一尺五分の正方形深さ約五寸の木で作つたものであります。

明治の末期よりだん／＼丸セイロに変わつてきました。丸セイロの方が使い安く軽便でつく人も一度に多くつく事がなくなりまして。丸セイロは唐検と云う木で作られ継目は全部桜の皮でぬつてあります。

五升つき一つのもの「重」と云つて二つのものがあります。大きさは大小ありますが普通は五升釜にあうように作つてあります。最近餅つきも木の臼から機械に変わり、ふかしもガスで簡単にできるようになりましたので、昔のように朝早くからあちこちでもちをつく音が聞こえなくなつてしまいました。

博物館だより

博物館新館「引渡し」
55年度より建設が進められていた、博物館新館が完成し、去る11月28日建設業者より大町市に引き渡された。

新館の開館は57年6月5日の予定で、現在館内展示の作製作業が進められている。なお現在の旧館は57年5月6日より休館となる。



キーボックスを受領する大町市長(左)

平林国男館長表彰
去る11月5日、博物館法施行三十周年を記念した表彰が全国博物館大会で行なわれ、平林館長は博物館運営等の功績により文部大臣表彰を受けた。

山と博物館 第26巻 第12号
一九八一年十二月二十五日発行
発行所 長野県大町市TEL②〇二二二
大町山岳博物館
印刷所 長野県大町市依町 大糸タイムス印刷部
定価 年額一、二〇〇円(送料共)(切手不可)
郵便振替口座番号(長野四一三三九九三)